



だい かい 第3回インクルーシブ教育フォーラム in おきなわ愛楽園
きょういく
あいらくえん

HUMAN RIGHTS THEATRE

じ ん け ん え い が か ん

人権映画館

か つ ど う ほ う こ く し ょ

活動報告書



かい さい び ねん がつ にち ど
開催日:2018年12月22日(土)

かいさいばしよ こくりつりょうようじょおきなわあいらくえん
開催場所:国立療養所沖縄愛楽園



ねんど じよせいじぎょう
2018年度 JT NPO助成事業

もくじ
目次

1.	開催要項 ^{かいさいようこう}	1
2.	ポスターデザイン	3
3.	実行委員会 ^{じっこういいんかい} の様子 ^{ようす}	4
4.	当日の様子 ^{とうじつ} (写真 ^{ようす} ^{しゃしん})	8
5.	トークセッションの内容 ^{ないよう}	12
6.	ConstantGrowth (コンスタントグローウ) について	29
7.	アンケート	30
8.	新聞記事 ^{しんぶん} ^{きじ}	31
9.	総括 ^{そうかつ}	32

1. 開催要項

第3回インクルーシブ教育フォーラムinおきなわ愛楽園

HUMAN RIGHTS THEATRE

じんけんえいがかん
～人権映画館～



趣旨

障害のある人となない人が共に生きながら育ちあうことのできる共生社会(インクルーシブ社会)を実現するために、2016年は重度障害者の就学、2017年は優生思想に焦点を当て、インクルーシブ教育フォーラムを開催してきた。そして、今回のテーマは「人権」。

国によるハンセン病患者の強制隔離政策が生んだ差別や偏見の歴史の中で数々の人権運動が繰り広げられてきた現場でもある国立療養所沖縄愛楽園を、今回のインクルーシブ教育フォーラムの会場とした。そして、元ハンセン病患者の女性が尊厳を失わず生きようとする姿を描いた映画「あん」を、愛楽園で上映することで、参加者にハンセン病や人権について考えてもらい、沖縄に新たな人権と文化の息吹を起こしていきたい。

開催日時：2018年12月22日(土) 午前11:30開始 午後8時終了 (開場午前11時)

開催場所：国立療養所沖縄愛楽園公会堂・QOLセンター (沖縄県名護市済井出1192)

参加人数：113名

主催：NPO法人沖縄県自立生活センター・イルカ

おきなわインクルーシブ教育推進プロジェクト

共催：愛楽園自治会 NPO法人HIV人権ネットワーク沖縄 DET沖縄

北部自立生活センター希輝々 自立生活センターまんだ

自立生活センター南 十字星 自立生活センターインクルーシブ

協力：シアタードーナツ

後援：沖縄県 沖縄県教育委員会 社会福祉法人沖縄県社会福祉協議会

名護市 名護市教育委員会 社会福祉法人名護市社会福祉協議会

沖縄タイムス 琉球新報 宮古毎日新聞 宮古新報 八重山毎日新聞 八重山日報

琉球朝日放送 琉球放送 沖縄テレビ NHK沖縄放送局 ラジオ沖縄 FM沖縄

日本障害フォーラム DPI日本会議 全国自立生活センター協議会

じんけん えいが
人権×映画 オープンシアター
 いっしょ じんけん かんが いばしょ
一緒に人権について考えませんか？ 居場所ってなんだろう？

〈プログラム〉

12月22日(土)

- 11:00 かいじょう **開場**
- 11:30 いんしょく かいし **飲食ブース開始 (QOLセンター付近)**
- 12:00 **ConstantGlowth (コンスタントグロウ) ミニライブ**
- 12:30 かいかい かいかいあいさつ らいひんあいさつ **開会 開会挨拶、来賓挨拶**
- 12:45~14:38 えいが じょうえい ふくおんせい じまく **映画「あん」上映 (副音声・字幕あり)**
- 14:50~15:50 えいが じんけん ぎんじょうまさはる ほか **映画についてのトークセッション (ゲスト：金城雅春さん他)**
- 16:00~17:53 えいが じょうえい ふくおんせい じまく **映画「あん」上映 (副音声・字幕なし)**
- 18:05~19:05 えいが じんけん ぎんじょうまさはる ほか **映画についてのトークセッション (ゲスト：金城雅春さん他)**
- 19:05~19:30 **ConstantGlowth (コンスタントグロウ) ミニライブ**
- 19:30 へいかい **閉会**

じょうえいさくひんがいはう
 ○上映作品概要

えいが 「あん」 (2015年・河瀬直美監督・日本・カラー) 1時間53分

おも しゅえんしゃ きき きりん ながせまさとし うちだきやら いちはらえつこ
 主な主演者：樹木希林 永瀬正敏 内田伽羅 市原悦子

もと びょうかんじゃ じょせい ぞんげん うしな い すがた ていねい
 元ハンセン病患者の女性が尊厳を失わず生きようとする姿を丁寧
 に紡ぐ人間ドラマ。ドリアン助川の同名小説「あん」を、世界を舞台
 に創作活動続ける監督の河瀬直美が映画化。日本を代表する樹木希
 林をはじめ、抜群の演技力で独特の存在感を放つ永瀬正敏、樹木の実
 孫である内田伽羅や、芸歴50年を超えようやく樹木との共演が実現
 した市原悦子など、豪華キャストで贈る、心揺さぶる作品。



©2015映画「あん」製作委員会/COMME DES CINEMAS/TWENTY TWENTY

一 あらすじ一

えん せんたろう ながせまさとし
 縁あってどら焼き屋「どら春」の雇われ店長として単調な日々をこなしていた千太郎(永瀬正敏)。
 そのお店の常連である中学生のワカナ(内田伽羅)。ある日、その店の求人募集の貼り紙をみ
 て、そこで働くことを懇願する一人の老女、徳江(樹木希林)が現れ、どら焼きの粒あん作りを
 任せることに。徳江の作った粒あんはあまりにおいしく、みるみるうちに店は繁盛。しかし、心
 ない噂が、彼らの運命を大きく変えていく…

2. ポスターデザイン

第3回インクルーシブ教育フォーラムの おきなわ愛楽園

HUMAN RIGHTS THEATRE

！人権映画館！

イブイブイブに大切なあの人と映画を語ろう。



「あん」(2015年・河瀬直美監督)
元ハンセン病患者の女性が尊厳を
失わず生きようとする姿を丁寧に語るドラマ。

「あん」は、その時の病人施設の跡地を貸して、そこで働く
ことを願う一人の学生、健江(栗木芽都)が現れ、
ども焼き料理あん作りを伝えることに、健江の作った
あんはあまりに興味なく、みるみるうちに店は閉鎖、
しかし、心ない噂が、彼らの運命を大きく変えていく...

上映時間 トークセッションあり！

- ・12:45～(副音声・字幕あり)
- ・16:00～(副音声・字幕なし)

参加費 \$00 円分の食事券付き

【当日券】1200円 学生700円
【前売券】1000円 学生500円

※中学生以下無料
※介助券券が必要な場合、介助券券は
無料となりますのでお申し出下さい。

手紙、資料筆記あり
駐車場あり(無料券)※20名上限
その他会場詳細が必要な方はお問い合わせ下さい。

飲食ブース

- ・カレー
- ・コーヒー
- ・ポップコーン

お問い合わせ・お申し込み

NPO 法人 独立生活センター・イルカ西事務所
TEL 0849-2420 / FAX 0849-2427
E-MAIL info@ilc.or.jp (言語：英語)

2018年度 JT NPO 協賛事業

おおさか げいじゅつだいがく かよ おきなわしゅっしん おおしろ たの
大阪の芸術大学に通う沖縄出身の大城さん(22)にデザインを頼みました。

すてき
素敵なデザインをありがとうございます。

3. 実行委員会の様子

私たちは、イベント当日に向けて、計9回の実行委員会の集まりを設け、話し合ってきました。ここでは、イベントに向けての活動として実行委員会の集まりの様子を紹介していきます。

第1回 2018年10月8日(月)



最初の集まり。どのようなイベントをしたいかみんなで自由に話し合いました。この時の話し合
いでは、「配慮のある教室」を何名かでロールプレイして、各グループに課題を伝え、ディスカッ
ションする…ということをやりたいと話し合いました。「学校をつくりたい」という思いが根底にあ
ったため、グループでのディスカッションを通して「こんな学校があったらいいよね」ということも
考えていきたいという意図がありました。

また、これから集まりを行っていく際の司会と書記も決めました。集まりに参加できなかった
方々も話し合った内容を理解するために、書記は話し合った内容をライングループへのせて伝え
ていくことになりました。

第2回 2018年10月12日(金)

最初の集まりの4日後、前回(10月8日)の話し合いでできた「配慮のある教室」というロールプ
レイをする内容は変わらず、このロールプレイの中に性の問題で悩んでいる子もいれるべきとい
う意見も出ました。イベントも約2か月後ということで、宣伝方法、ポスター作り担当、イベントの
参加費などを決めていきました。

第3回 2018年10月17日(水)

「今回のフォーラムの目的」について見直すことから話し合いが始まりました。学校をつくることよりも、まずは沖縄県全体のシステムを変えていきたい。そのために、沖縄県に人権組織を立ち上げたいという目標ができました。そして、多くの人権運動が繰り広げられてきた現場でもある愛楽園が会場であるため、「人権」をメインに出そうということになりました。

短期目標…定期的にイベントを行い、人権についての考えを広めていく

中期目標…人権組織を立ち上げる(県民の人権意識を高めていく)

長期目標…共生社会の実現

第4回 2018年10月19日(金)

前回(10月17日)の話し合いがおわった後から、グループラインでの話し合いも進んでいました。若い世代へ伝えていきたいという思いがあったために、フォーラムではなく、「人権文化祭」というような模擬店や映画上映を行う、啓発イベントにしていこうという方向性になりました。映画上映・ダンス・お笑いのステージに、飲食ブース、展示ブースをやろうと話が進む一方で、イベントまで時間が足りるのかという懸念の声もありました。

第5回 2018年10月24日(水)

前回(10月19日)の話し合いで、映画上映・ダンス・お笑いのステージや飲食ブース、展示ブースがある「人権文化祭」を行うには時間が足りないということから、映画上映をメインにした「映画祭」という形で進めていこうと決まりました。どのような映画を上映するのか、予算の都合も考えながら、みんなで意見を出し合いました。また、食べ物も食べられるように出店ブースも設けようと思われ、みんなで何が食べたいか意見を出し合い、考えていきました。次回の集まりまでには、シアタードーナツへ映画上映の相談に行くこと、出店ブースの見積もりをつくることを課題として、話し合いは終わりました。

第6回 2018年11月7日(水)

題材がハンセン病を扱った作品である「あん」を上映したいという意見があり、みんなで話し合い、「あん」を上映しようと決定しました。そして、人権映画祭ではなく、「HUMAN RIGHTS THEATRE～人権映画館」というイベント名がこの話し合いで決定しました。ポスターのデザイン案もできました。そして、映画上映後に参加者も交えたトークセッションを行うことも決定しました。

第7回 2018年11月8日(木)

この日は、愛楽園にて、愛楽園自治会の方も交えてイベントについて話し合いをしました。お弁当の準備、チケット制、ポスターに付け加える項目、イベント後半にあるショータイムで何をするか等について話し合いが進みました。実際に現地を見ることができ、映画上映をどのように行うか、出店ブースはどこに設けるか等、より具体的な話し合いができたと思います。

また、愛楽園ではない別の場所では、ポスターのデザイン担当の大城さんと会い、人権映画館を開催することになった経緯や人権映画館の趣旨、ポスターデザインについて話し合うことができました。

第8回 2018年12月6日(木)

前回(11月8日)の話し合いから、1ヶ月後に話し合いを行いました。この1ヶ月間でポスターやチケットの印刷が完了し、出店に協力して下さるお店との打ち合わせ、託児所ボランティアの協力願い、後援の依頼、宣伝を進めてきたので、それらについての確認を行いました。また、当日の配布物作成・ショータイムの内容など作成するものや決めていかなければならないことも多く、より一層がんばっていきましょうという雰囲気での話し合いは終了しました。

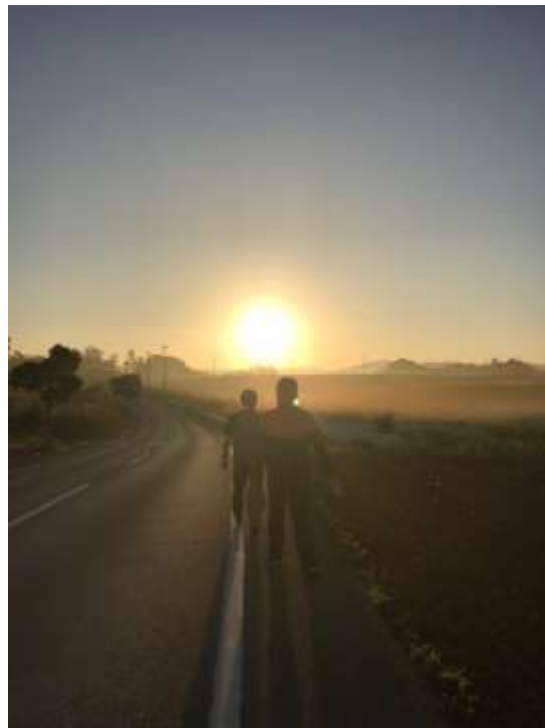
第9回 2018年12月20日(木)

開会の挨拶・司会進行・閉会の挨拶などの担当を決めていきました。会場設営・託児所・トークセッション・チケット・準備するもの等について確認、決定していきました。イベント2日前の話し合いのため、確認することがほとんどでした。



4. 当日の様子

12月22日(土)、イベント当日の様子について、写真を掲載しながら紹介していきます。



当日の朝…

とても綺麗な朝日の光をたっぷり浴びながらのスタート。朝日をバックに、なんにも言わずに黙々と作業をする男性陣。背中で話しています。

イベントで歌ってくださった謝花勇武さん。
音響準備の様子です。





かいじょう ようす みな め せん さき えい が じょうえい
 会場の様子。皆さんの視線の先に映画が上映されるスクリーンがあります。
 ござでよこになりながら、すわ み ながら見るのもよし。イスにすわ み ながら見るのもよし。
 くるま かんが とお みち おお
 車いすのことも考えて、通路は大きくしたりしました。



こうほう せっち はん た えい が み かいじょう
 後方にはテーブルを設置して、ご飯を食べながら映画を見られるような会場にしました。



ちょうかくしょうがいしゃ じょうほうほしょう しゅだん ようやくひっき
聴覚障害者への情報保障の手段のひとつである要約筆記。
アイセック・ジャパンさんのきょうりょくのもと、スクリーンのまえにはようやくひっき うつだ
をせっちしていただきました。



うけつけ とお かいじょう はい でいりぐち うけつけ せっち
受付をとおって会場に入れるように、出入口のところに受付を設置。



えいがかんしょう
映画鑑賞にはかかせないポップコーン！アチェンドさんのポップコーンです。



あいらくえん しょくどう きょうりょく
愛楽園の食堂さんの協力のもと、
やきそばも販売！

えいが
映画「あん」で出てくるどら焼きも、
のびる作業所さんの協力のもと
販売できました。

ほか
その他にも、コーヒーやカレーライス、みそ汁がありました。



きょうりょく
ご協力いただいたアチェンドさん、ワーカーズホームさん、しょくどう
の食堂さん、のびる作業所さん、ほんとう
本当にありがとうございました。なごてん
愛楽園

5. トークセッションの内容

今回のイベントでは、映画上映後に参加者も交えたトークセッションを行いました。トークセッションのゲストとして、愛楽園自治会長の金城雅春さんに参加していただき、ハンセン病経験者としての意見や愛楽園についてお話しいただきました。

ここでは、そのトークセッションの内容を紹介していききたいと思います。

《第1回 トークセッション》 時間14:50~15:50

司会／それでは、今からトークセッションのほうを始めていききたいと思います。テーマとしては、この映画についてですけれども。みんなで、映画の感想をお話できたらなというふうに思うのですが、まず最初に金城雅春さんのほうから、今回のこの愛楽園でのことやハンセン病のこととかを、10分ぐらいで話をしてもらいたいと思います。よろしくお願ひします。

金城／愛楽園自治会の会長をしています、金城です。きょうはようこそ、愛楽園お越しいただきまして、ありがとうございます。また、ハンセン病をテーマとした「あん」という映画、いかがでしたでしょうか。モデルになったのが、星塚敬愛園という鹿児島にある療養所で、主人公である「あん」をつくっていた、樹木希林さんは、鹿児島に役作りのために何度も通っているんですよ。去年「あん」の上映をしたのですが、そのときには助川さんと監督と原作者、それと浅田美代子が来て、話して、その後懇談をしたのですが、浅田美代子は亡くなった主人公とかなり親しくなっている。そのために、この映画に出ていたというふうな話をしております。

私の感想としては、画面がきれい過ぎるなどということ、実際はもっと人間模様はどろどろしたものです。偏見、差別はあんなもんじゃない。非常に厳しい。家の外にでて、あいうことが自由にできるということはまずあり得ないと思っていますね。高校生が指の変形を指摘したんですけど、知らん顔していたんですけどね、樹木希林は、変形している指をさして、体の変形というのは、ハンセン病の病気の後遺症なんですよ。ハンセン菌という菌自体が神経にやどる菌なんですよ。そのために神経がやられる。炎症を起こして、神経がだめになってしまう。ですから、あついのもいたいのも、かゆいのも何もわからない。

そのためにやけど、熱湯でのやけどを起こす人がたくさんいた。

最近みんな温度調整ができるんですけど、以前はそういうことができないので、熱湯をそのまま体中にかけてやけどするということが、非常に頻繁に起こっていた。ですからそのための傷もできていて、映画に出ていたとおり、指をこういうふうに曲げてましたよね。あんな綺麗な曲がり方はしない。そういったことでは、十分に甘いような感じで、感覚的にもちょっときれいな映像になってしまっているということですね。

本土での映画だから、沖縄とは若干違うところがありますが。沖縄では豆腐づくりとかそういったものやっていますが、自給自足の生活をしていたんで。もちろん、その材料もみんな自分たちで探してくるということやっているといます。豆腐とか豆とかはアメリカさん、たくさん持ってきたから、戦後は。そういうことでは食べれるようになっていたみたい。そういった分、この映画とは、愛楽園とその映画とは、実態がちょっと違うということを知っておいていただければと思います。

これは、最近になってテーマに持ってきた映画なんですね。ですから、映像の中には、東京にあります、多摩全生園での映像が入っていたのですが、ちょっと今とは違う状況になっています。多摩は今、人権の森構想ということで、市もあげて森をつくっています。雑木林もたくさんあります。散歩道もつくられていて、あのようになっています。納骨堂出ていましたが、あれは多摩全生園です。たくさんの方の遺骨がいっぱい並んでいます。沖縄の愛楽園とは状況が違います。愛楽園はガラガラです。その違い、わかりますか。本土では、みんな遺骨は家族が持ち帰ることがない。このために、納骨堂がいっぱいになっている。愛楽園は、園内に2カ所に納骨堂がある。園の納骨堂と、聖公会の納骨堂。もう一つは、外のほうに教会の納骨堂があります。いくつかの納骨堂に分散しているんで、園の納骨堂ががらがらというのがあります。

そういったことで、非常に本土とは違う状況。もちろん、本土より愛楽園の場合は、30年も遅れて療養所が設立されております。ことしで開園80年です。今、入所者の数が、在園者の数が140名です。平均年齢が84歳を超えております。ことし亡くなったのが12名ぐらい、高齢のため、老衰で亡くなるとか、そういったのがたくさんあります。それは全国同じようなもので、全国で入所している数はもう1300をきりました。年間、200名を超えた人たちが、どんどん園の中で強制収容された人たちが亡くなっていく。愛楽園でも、今現在、在園している人で80年です。80年、愛楽園で過ごしている。ハブよりも人間がこわいといわれていた年寄りたちがいまだに残っているということです。それだけ、偏見、差別、迫害がひどかったということなんですね。皆さんはハブのほうの方が怖いすよね。しかし、ハンセン病の人たちは、ハブより人間のほうが怖いということを言われていました。ハブは自分が逃げればいいんですけど、ハンセン病にかわって人間は、そういう偏見、差別を非常に行ってきた、それが全然違うところ。ハンセン病に関する映画はたくさんあります。それを見ても、いろいろな問題が出たりしております。

「砂の器」という小説ありますけど、それもテーマはハンセン病なんです。それが映像化されております。そのために、われわれの組織である全療協は監修しております。見て問題のあるところは修正させたりしています。この「あん」もそうです。そうしないと、偏見、差別を助長してしまうおそれがあるんですね。ハンセン病をよく知らない人たちが映像にすると、非常にきつい映像になってしまう。逆に、変なところを見せると、それがハンセン病かという。

今のハンセン病の人たちは、全てもう治っております。回復者です。ハンセン病、治った回復者です。体が変形している、足が変形しているのは、後遺症なんです。皆さんにうつることはありません。私もそうです。沖縄県内、本土にも、日本人が病原菌を持っている人はおりません。ただし、今、日本には外国からたくさん来っています。発展途上国からもたくさん来っています。そういう中から、発病する人はおります。年間4、5名、発病

しています。この人たちは、今はもう、発病すると薬を投与して、全て完治して、自国に帰すということをしております。今は、特効薬が出ていて、世界中で同じような薬が使われている。3種類の抗生物質を組み合わせで投与する、そういう時代になっています。インフルエンザより簡単に治る病気になりました。そういったことで、本当にこの映画を観て、先ほど言いましたように、「砂の器」とか、「ベン・ハー」という映画があります。そういうのも見てみてください。ハンセン病が出てきます。昔はどういう描かれ方をしていたか、わかると思います。ちょっと時間オーバーしたかな、次の人にお渡ししたいと思います。

司会／ありがとうございます。本当に、雅春さんに話を聞いたら10分では足りないくらい、今までのこのハンセン病の歴史とか、当事者としての思いとか聞けると思っていますので、それも今後また、かかわっていきながら聞いてもらえたらいいなと思います。きょうは、スタート地点だと思っておりますので、よろしく申し上げます。次は、山口県のほうから来ていただいた下関CILの河本さん、お願いします。

河本／下関から来ました、河本です。

この「あん」を見て、僕は6歳のときからずっと施設にいたんですよ。21まで。それから、そのまま一人暮らしを始めたので、親元にいた時期はトータルして、養護学校で2カ月くらい家に帰れたとか、トータルして1年満たないんですね。そうすると、家族というのがどういうものなのかという認識が、すごく薄くなるんですよ。僕は、離婚しているんですけど、家族とどういふふうな人間関係をつくっていったらいいのかというふうなことは、すごく僕個人のテーマなわけですよ。それで、分けるということが、すごく問題だになっていふふうを感じるの、家族とも分けたり、僕も施設にいたときは、もう周りの人たちとの関係性っていうのはなかったですね。

僕の病気っていうのは、ポリオという病気なんですよ。昔、小児麻痺って言って、日本中蔓延したんですね、すごく。大人になって、飛行機に乗ることがありまして、海外に行くときに、何の障害と聞かれるわけですよ。ポリオっていうと、すごくびびるんですよ、周りの人が。それは、ワクチンがないところだと、僕はもうポリオ菌は死んでいるのですが、そういうふうなことがすごく敬遠されたりですね。僕もそういうふうなことは受けましたね。だけど、何よりも家族や社会とですね、切り離されて、生活せざるを得なかった人たちのことを考えるとね、すごい、こう、何ていうのか、ああ、もう、その、思わずですね、ぐっとくるものがありました。すごくいい、僕は、すごくいい映画だったなって思います。差別とかも、そのまま表に出されて、いい映画かなって思いました。ありがとうございました。

司会／ありがとうございます。

今回、人権の映画祭、人権映画館ということで、銘打っているんですけど、やっぱり、人権って、ハンセン病のことや、映画の中で、樹木希林さんが遺言の中で、店長さんが同じ目をしているという、だから惹かれたんだと言ってましたけど、この差別というのが、差別

や人権ということであろうと、いろんな立場の人たちがつながれるのかなってというのが、思いとしてあります。障害や男女の差別や、本当にさまざまな問題があるんですけど、やっぱりその立場を超えていきたいなというのが、今回の一つの趣旨になっています。ありがとうございました。

それでは、次、由衣さんからいって、鈴子さんにいきましょうか。若い立場で、今回、インクルーシブ教育フォーラムというのが一番、目玉にあります。インクルーシブという言葉は聞き慣れないと思うんですけど、これについて、若い立場の仲地由衣さん、話をしてもらえますか。

仲地／皆さん、こんにちは。イルカの仲地といいます。私はですね、今、23歳なんですけれども、ちょっとこのインクルーシブ教育について、話をさせてもらえたらと思います。

私の出身は、沖縄本島よりももっと北にある伊平屋島という島なのですが、この島は、本当に田舎で、島にあるものといえば、ガソリンスタンドと、信号機1つと、売店と、海と川が広がっています。ここにあるようなコンビニだったり、映画館というものはないので、本当に自然に囲まれた島で育ちました。

そこには、障害児教育に特化しているような施設だったりとか、そういう情報源が少なく、私が就学する前ぐらいから、この島の人たちには、ここじゃ適切な教育だったり、サービスが受けられないかもしれないから、沖縄本島のサービスが受けられるところに移り住んだほうがいいんじゃないかという島の人たちの声もありました。

ですが、島には中学校までしかなくてですね、障害ある、なしに関係なく、私たち、子どもたちはみんな、15歳になって、中学校3年生を卒業すると、進学のために島を離れなくてはいけなくて、この限られた15年間を同じ同級生の子どもたち、地域の人々と一緒に成長してほしいという両親の思いがあって、島で学校生活を送ることを、両親は決意してくれました。

この島の人たちの思いやりといいますか、人と人との絆というのは強くてですね、何か困っていることがあれば、みんなが声を掛け合って助けてくれる、すごく、いい島です。

ですが、この教育の部分で、クラスの中に、私、同級生の中で私だけが当事者だったんですね。ほかのみんなは健常者で、通常学級で勉強をしていました。私小学生のころから、籍を特別支援学級において、みんなと一緒にできるような教科は、この、みんなのところに行って、一緒にやっていました。今考えてみると、見た目といいますか、感覚的にはインクルーシブ、障害ある、なし関係なくみんなと同じ場所で学習するといえているのかなと、最近の私は思いました。ですが、よくよく考えてみると、籍は特別支援学級にあって、自分が勉強できるものときに通常学級に行って勉強するという形なんだなというふうにわかって、それって本当の意味でのインクルーシブっていえるのかなって、疑問が今あります。籍をどこにおくとか、そんなの関係なく、同じ場所で、分からないところはサポートしてもらって、一緒にできるところはみんなと一緒にやるのがインクルーシブなのかと、今の私は思っています。

そして、高校は、みずから志願して、ちょっと私自身の障害特性も知りたくて、浦添に

ある特別支援学校に進学しました。そこではですね、もちろん、自分に合ったニーズの学習を受けることができました。

ですが、入学試験がですね、受かる、受からないという基準の入学試験ではなくて、みんな合格できるんです。その入学試験で何をするかというと、子どもたち一人ひとりの学習能力を見るんです。

それで、クラスを分けていくんです。同じ年代の子どもたちであっても、学習レベルが高い子はこのクラス、ちょっとレベルが低い子はまた別のクラスというふうに分けられてしまいます。なので、高校3年間、同じ年代の同級生は当時13名いたんですけど、私はほとんど私と同じクラスの友達ももう一人いたのですが、2人で同じ内容の学習をしている状況でした。そのとき思ったのは、たしかに自分のニーズ、個々のニーズに合わせた特別支援教育は必要だと思ったのですが、それをやるからといって、同じ年代なのに、クラスを分ける、これはインクルーシブではないと思いました。

今でも、分けて学習をさせる、特別支援教育を許可させるために分離するというのも、まだ続いています。なので、私は、その分離教育も全てなくして、本当の意味でのインクルーシブ教育、みんなと同じ場所で勉強できる環境が必要だと思っているので、これからも活動をみんなと一緒に続けていけたらいいなと思っています。以上です。

司会／ありがとうございます。

今、由衣さんが言っていたインクルーシブ教育と、さっきの金城さんが話していたハンセン病のことって、全然舞台が違うように感じるかもしれないけど、実は分離って、社会と分けられてしまったり、障害者だけで固められたりでいうと、実は同じ問題、これは、権利とか人権の問題ではつながっていると言えると思います。やっぱり、10人に1人は障害があると言われる中で、教室の中に1人しか由衣さんがいないというのもちょっとおかしいし、また、障害がある子ばかりがいる学校の中で、本当は、普通の学校に行きたいけど、1979年に特別支援学校の義務化というのが始まって、ここに入るのが障害者は義務なんだという刷り込みがどこかで行われている。だけど、本当の義務教育の意味は、国や学校、親や社会側にある。子どもを教育を受けさせる義務であって、分けることが義務ではないはずだけど、だんだんそれに置きかわっていくという法律の怖さもあるのかなと思います。

そこら辺の背景を長位鈴子さんが来てくれたので、話を10分くらいでお願いします。

長位／長位鈴子です。

河本さんと由衣さんの言っていた、金城さんの言っている分離社会、分離教育がどんなふうに自分たちの意識を変えているのかということを含めて、私は別の視点から話をしたいと思います。

私も分離社会の中で生きてきたし、分離教育を受けていて、私たち障害があると価値のない人間だとずっと思わされてきました。今でも、ときには落ちたときとか、精神的にまいっているときは、社会の中で役に立っていないんじゃないかと思うことってあります。

その葛藤の中で、私は隔世遺伝で、どこに遺伝を持っているかわからないんですけど、子どもたちが、今度結婚して、自分の子どもを持つときに、私は、自分の子どもたちには、あなたたちにはこういう遺伝子を持っていると。母ちゃんのような身長が120センチしかない母ちゃんの遺伝子ももっている。父ちゃんみたいな筋ジスでだんだん進行性になる遺伝子ももっていて、どこかが出て来る確率があると伝えてきました。結婚して、子どもを産むときに、思ったのは、どんな子どもであっても産んでちょうだいねと。もし、障害があったとしても大丈夫だから、心配しないで産んでちょうだいと、私は言いました。お嫁さんは、大丈夫、お母さん、ちゃんと育てていきます、いってやりました。娘にもそれはずっと言っていたので、出生前検診を受けると、もしあなたのおなかに障害がある子どもが身ごもったとやったら、九十何パーセントの人たちが墮胎をするというのが、今統計上出てきています。

なぜ障害があるとおなかにいるときに、おろされるのか、産むのかというのを、責めるというか、がんを宣告されるような感じだと思います。あなたがんですよ、余命あと1カ月と言われるのと同じように、おなかにいるときの子どもが今、水頭症だったり、筋ジスだったらすぐわかるので、そしたらおろすという確率になるんですね。娘のときにも、娘はおなかにいて、ちょうど、福島に行ったときに結婚しますとといったとき、顔合わせのときも、私はあえて、介助者を使いながら生活しているので、子どもたちに迷惑をかけることはしませんと。

依存することもしないし、子どもたちには子どもたちの人生を歩んでほしいと思っているので、新しい家庭をつくってくださいと思っていますよということを、相手方のお父さん、お母さんにお願いをしたときに、実際、今度、娘が身ごもりました。そのときに、相手方の親から言われたのは、羊水検査をしてみてくださいと言われたんですね。うちの娘も泣きながら、どうしようって言われてしまったんですけど、お母さん、羊水検査を受ける、受けないというのは、私は受けたくない。だけど、受けろと言われた。どんなふうにして説明したらいいというふうに、泣きながら電話来たので、私は、あなたは受けたいの、受けたくないの、受けたくない。受けたとして、もしおなかに障害がある子がいるとわかったとき、10カ月間、おなかでもつことができるかとやっただけに、本当に相当な覚悟が必要になってくるよと。それよりは、わからないほうがいいんじゃない。

自分もそう思うって、別にお父さん、お母さんを見ていて、不幸に思ったことはないし、大変さはあったにせよ、差別はあっても、でも、それは社会のせいであって、自分たちのせいじゃないっていうことは、本当に育てて中で、自分は思っているから受けたくない。でも、相手の親にどう説明したらいいかわからないとあって、泣いていたんですね。これを聞いたときに私は怒りがこみ上げてきて、これは、社会が障害を持つ、持たない、優生思想という、優れている遺伝子と、優れていない遺伝子というふうに分けてしまう、この考え方がそこに大きな問題点があり、ハンセン病もそうです。国の施策の中で、そういうふうに社会をつくりあげて、菌がうつると。だから、らい予防法の中で隔離政策をしてきて、自分たちも金城さんと会うまでは、やっぱりうつるんじゃないかとどこかで思っていました。

私、金城さんに聞きました、うつるんですかと。そしたら、うつらないよと言うから、そうですか、わからないから差別をする。だって、今度は自分の子ども、孫に障害があっても、オーケー、はい、ということで、無事に産まれてきたときには、すぐ見たのは、手が5本あるかとか、足が曲がるかとか、わんわん泣くかとか見て、安心はしたんですけど、今度は歩いてみて、筋ジスのお父さんの遺伝子が入っていたら、多分また筋ジスになると思っていたので、そのときそのときで考えてみたいと思うんですけど、若い人たちにぜひ言いたいのは、これから子どもを産むときに、自分たちの頭の中にある、優生思想ということをはびこってないか、真剣に考えてみて、分離教育、分離社会じゃなくて、みんな一緒に社会をつくりあげていきましょう。以上です。

司会／ありがとうございます。

今、鈴子さんが言っていたように、若い人たちに来てもらいたいということで、今回、これをやりました。1週間前のハンセン病と人権フォーラムでも、世代、高校生、甲学生とか、「光の扉を開けて」という劇を紹介して、最後に壇上にも、厚労省の人や、その県の人や、また、そういう演じた高校生たちとか来て、ハンセン病の当事者の人たちということで、いろんな人が壇上に上がっていたフィナーレだったのですが、何かそれも一つ象徴しているなというのが思って、分けられたくない、言っていたんですね。ともに生きていきたいというメッセージがそこに込められていた。

だから、それを自分たちは実現していきたいと思いました。じゃあ、若い人の代表ですね。

意見、いただきたいんですけど。どなたか。

映画の感想でもいいし、今の話を聞いてでもいいんですけど、じゃあ、左恭さん、お願いします。

左恭／いいですかね。皆さん、お疲れさまです。

本当に最近、いろんなメディアとか、いろんな場所でフォーラムで、意見交換とかをすることがあるのですけれども、何か、見えない世界の壁とかがどうしてもあるなっていうのは、最近しみじみ実感します。

例えば、バスに乗っているだけでも、あんた、頑張ってるねとか、いろいろ言われることがあるんですよ。以前には、お金をもらったりとかというのは、すごく、実は、悔しいんですね。というのは、こっちでしゃべる前に信号が変わっていなくなったりとかっていうことがすごくあるので、今、鈴子さんとか、河本さんとか、話にもあったように、知らない間に差別の対象になってしまっていることがすごく悔しいなどと思います。

司会／ありがとうございます。

それでは、そちらに座っている学生さん。お願いします。

上原／お疲れさまです。琉球大学の上原香と申します。

きょう、金城さんがおっしゃっていたみたいで、この映画を見た後に、甘いついていう言葉がすごく重いなと私は思って、自分たちがすごく理解できないくらい、想像できないくらいの差別があったんだなと思いました。

私自身は、大学今、福祉コースにいますが、福祉とか全然興味なくて、障害を持っている方とも、全然かかわる機会がなくて、すごい自分の中にも偏見があったと思います。ちょっとずつ、障害を持っている方とかかかわっていく中で、自分の中の偏見は知らないから、偏見であって、人を個人として知ること、100%はもちろんなくなりませんが、少しずつ溶けていくのかなと思います。だから、障害者とか、健常者としてではなくて、その人、個人として知ることがすごく大事だなと思って、そういう機会がどんどんふえていくといいなと思いました。以上です。

司会／ありがとうございます。1週間前のその「光の扉をあけて」のときも、ある日、その当事者の人が言っていたのが、感動だけで終わらないでくださいねと言っていて、やっぱり今のことがすごい大事かなと。痛みも感じるかもしれない、自分って、こんなんでいいかなと思うかもしれない。

でも、まず知ることからスタートだよなということで、学生が言っていたのが、まず知って、感じる。考えて、行動するという、これが大事なんだよというのを言っていたんで、今回もやっぱりそこは大事だなと思います。すみません、時間が来てしまったので。

発言したいという方がいますので、最後、1人、どうぞ。

上運天／私も上原香さんと同じく、琉球大学の福祉コースに所属しています、上運天と申します。

手短かにいいますが、きょう私、この会に参加してみて、小さいころから、障害をもった人とかかわる機会が全然なかったなという実感があって、その中で、私の中でも確実に偏見があって、どうしても偏見をもたないように思っているんですけど、そういうふうには考えていること自体も、そういう意識があるのかなと感じることもあって、なので、私自身としては、少しでもこういう会やイベントとかに参加して、かかわる機会を一つ一つ持って、ウエハラさんも言っていたように、人を個人としてみて接していけるように、これからも福祉の勉強を続けたいと思いました。以上です、ありがとうございました。

司会／将来は明るいとします。

ということで、きょうは、本当に感動では終わらないような、この映画とトークセッションできたと思います。じゃあ、次の映画は、字幕がない、そのままの上映になります。ちょっと発言述べられなかった方も、ぜひ、帰られる方はアンケートがあるので、記入して、受付に提出していただけたらと思います。よろしくお願ひします。ありがとうございました。

《第2回 トークセッション》 時間18:05~19:05

司会／今回また2回目ということなのですが、まず愛楽園自治会の金城雅春さんから、さっきとはまた違う観点で話をお願いしてもらえたらと思います。

金城／ただいま紹介いただいた、愛楽園自治会の会長金城です。きょうはようこそお越しいただきました。みなさんどうでしたかね。「あん」という映画は、テーマになっているのが、鹿児島星塚敬愛園という療養所をモデルにしたものです。療養所の中では、全てのものをお互いに分担しながら生活している。ですから、あんこつくるのも、お菓子つくるのも、おもちつくるのも、みんな自分たちでやっていた。手の悪い人がきねをもって、もちをつかって、どんなものだと思いますか。大変なんですよ。そういうことを深く考えれば、きりがありません。工夫をして皆さん生きてきたというところですね。

明治42年に最初の5カ所の療養所ができて、来年で120年です。愛楽園が昭和13年に開園して、ことし80年です。おくれた原因は、沖縄本島に狭いところに療養所をつくると、地域反対にあって、できなかったと。できて後、戦争に巻き込まれてしまって、愛楽園では、317名が、平和の礎に刻銘しています。戦争の犠牲者ということですね。強制収用して、逃げることもできない、そういう中で、栄養失調、マラリア、破傷風をおこして亡くなった人たち。当時、軍優先の政策をとられていたので、ハンセン病の患者なんて放って置くという感じですね。ですから治療すれば治るような小さな傷でもどんどん化膿して、指を悪くする、足を悪くするということで義足の人が多いし、指がなくなって、すりこぎみたいな人がいる。すりこぎになっているのは、戦争が近づいて防空壕を掘るために指を傷つけてしまって、ということですね。そういうのが愛楽園の、大体の概要です。今現在は140名在園しています。平均年齢が84歳を超えたところですね。今年1年間で12名亡くなっていて、ただ沖縄の場合には、退所した人がたくさんおられます。琉球政府時代にハンセン病予防法で対処することができたし、在宅治療というものができて、そこで回復した人がたくさん残っていて、退所者が500名くらい、在園者もそれくらいいるといわれています。皆さんの周りで生活していると思います。わかったら、どうぞ仲よくしてください。退所した人たちも、在宅で治療した人たちも、堂々と歩いていない、みんな隠れて生活している。なかなか顔を出してくれないために、啓発がおくれているのかなと思っています。

この間も、厚労省主催でのハンセン病問題シンポジウムをやったんですが、若い人から教育していこうということで、中学生、高校生が主体になって、ボランティアとして動いてくれました。若い人から教育していくという。年寄りには頭がかたいですからね。戦争が近づいてきたら、全国で軍事優先で行ってきた。無らい県運動というものが行われてきた。弱者は排除しろという動きがあって、その中にハンセン病も入っていた。精神障害なんかもみんな入っていますよね。自宅留置ということで同じようなことが行われてきた。ですから、そういったことはもう、二度と起こしてはいけないということで、ちゃんと意識を持って、皆さん運動を展開している方たちだと思うので、ぜひとも、

それをもっと強力に推進していく必要があるだろうと思います。一緒に頑張っていきましょう。

司会／本当にありがとうございます。今言った中で、若い人たちへの継承というところで、インクルーシブ教育に関して、私たちも運動を沖縄でやっていこうと思っています。やっぱり人権というところを一番根っこにしながら動いていくから、そのために、ハンセン病のことを知っていく、沖縄の条例の出発点に、この愛楽園をしたというのは、そういう経緯からでした。なので、今後も子どもたちに伝えていきながら、障害がある人やハンセン病の人たち、誰でも一緒に、ともに生きるということをどうやったら実現できるかという場所につくっていったらと思っています。次に、下関のほうから来ていただいた、お願いしていいですか。

河本／下関の河本です。

僕の先輩と後輩がまだ施設にいるんですよ。50年ぐらいいるんですよ。もちろん、僕は自立のすすめとかたくさんするんですよ。本人たちは、出たくないというんですよ。なぜかというのを、よくよく考えてみると、ずっと昔から施設の中に閉じ込められていて、その暮らしが当たり前になっているんですよ。思い返してみたら、僕も施設にいたときには、別に施設の暮らしが苦しかったから、嫌だったから僕は出たわけではないんですよ。施設を出たのは、やっぱり異文化の興味なんですよ。文化が違って、知らないんですよ。僕たちのことを。知らない人たちは、僕から見たらかわいそうな人たちに見えるんですよ。そういうふうになると、上から目線に聞こえるんですけど、本当に知らないからたくさんの差別をしたり、それから、偏見をもったり、いろいろするんですよ。

それで、障害を持っている人たちが、どんな重度、種類の障害でも、地域の中で生活ができるというふうに、僕たちは進めてきたし、これからもやっていくと思うんですよ。だから、分けるという考え方が、どんなに社会を、一つの方向にしか向けていないかということですよ。いろんな考え方、いろんな生き方が当たり前だと僕は思うんですけど、人はみんな違うんで。だけど、今の社会では何となく許されない、人の考えを認めない、だから戦争が起きたりするわけですよ。違う宗教だったら、対立したりね。いろんな考え方、生き方があって、考え方をぶつけ合うことによって、いい方向性がたくさん生まれると僕は思うんですよ。だからうちのCIL下関の団体の採用基準に、僕とは違う生き方や考え方や、それを持っている人たちがいたら、僕を助けてくれる人たちになるというふうに僕は思っているんですよ。そういう団体のつくり方をしているんですよ。だから、いろいろ違っていいんじゃないかなというのを、「あん」を見てすごく感じるんです。ありがとうございました。

司会／「あん」の中で、浅田美代子さんが「私だって好きでいってるんじゃない」と言っていますが、本当に差別する側っていうところかというと、本当に知らないのが発端なのか、本当に多いのかなという、知っている人がふえていくことで、変わっていくのかな。どら春も繁盛するんじゃないかと思えますね。じゃあ、次に、鈴子さん、お願いし

ます。

長位／きょう、ありがとうございます。

本当に、差別、偏見って、私は多分、どんなに時代が変わっても、なくなることはないのかなというふうに、思っています。しかし、その差別、偏見なくなることはなくても、低くすることはできるし、どうすればお互いに理解し合えるのかと思ったときに、自分も含めて、知らないことを知りたいと思うことから始めないといけないのかな。障害の違う著同士が手を取り合うとか、簡単にいうんですけど、すごく難しく、子どもたち同士で切磋琢磨しながら育ちあいをするのは、障害があってもなくてもあるところで、自分より障害が劣っているからとか、重度だからといって、いじめる対象になっている構造自体、大人の社会の縮小版で、子どもがいるというふうに思うことがあります。なので、一番に教育の部分から、小さいときから知り合うこととか、挨拶することとか、隣近所の人たちに助けを求めることをしたら、もっとはやいスピードで理解し合えるのかなと思うことです。

ここ最近思ったのは、熊本被災のときにある医療ケアの重度の人がいました。その人は、バギーの車椅子に乗って、言葉はしゃべれないし、吸引しているし、呼吸器つけているしという形で、でもずっと地域の中で生きてきたし、地震があったときに、彼女のお母さんが言っていたのは、すぐに隣近所の人たちが飛んできて、娘、大丈夫ねって、私が抱っこするから、あんた吸引器持ちなさい、あんた何持ちなさいといって、隣近所でたくさん助けてもらったと。本当に地域で生きるということはそういうことなんだねということを、熊本被災の後に、そう話していました。だから、その地域の中で生きながら、自分たちの存在をちゃんと出す。私たちの原点は、愛楽園が原点なので、次のステップ、ステージに立つときには立ち止まりたいなと思っています。雅春さん、ありがとうございます。

司会／ありがとうございます。若い人のほうに聞いていきたいと思います。カオリさん。いいですか。カオリさんは、学校って、どういうところに行っていたんですか。

有銘／アリメカオリといいます。私は、脳性麻痺で、はやく産まれすぎて、はやくおなかから出さないと危なかったんで、ちょっとはやく生まれてきました。養護学校。

司会／これは、小学校から高校まで養護学校だったんですか。

有銘／はい。

司会／カオリさんは養護学校に通っていたと思うんですけど、普通の学校にも行きたいと思っていましたか。

有銘／はい。

司会／カオリさんは養護学校に通っていたと思うんですけど、普通の学校にも行きたいと思っていましたか。

有銘／はい。

司会／それは、なぜ普通の学校には行けなかったんですか。

有銘／やっぱり、ついていけないとかあって、今でもあるんですけど、それをなくすっていうのが、ちょっと、脳性麻痺。普通の障害を持っていても、一人の人間として見てほしかったから。頭は普通で、ついていけなくても、やっぱり、やってみたら、ついていけたりするのかなど考えたことも、実は、誰にも言ったことないけど、ありました。

司会／じゃあ、最後に、有銘さんの夢を聞かせてもらっていいですか。

有銘／夢っていうか、障害を持っていても、産まれてきたら、そこでみんなと出会えてよかったし、自立生活、7年になるけど、まだまだ何もできないこともいっぱいあるので、それでも、施設から出てよかった。施設は、決まりの中で動く生活なので。夢。人といっぱいかかわって、もっと勉強していきたいです。

司会／ありがとうございます。自分も、おいしいのが本当に毎日食べたいという夢があります。

じゃあ、もう一段階若い吹雪くん、お願いします。

松田／北部自立生活センター希輝々の松田吹雪です。

僕は、一般の小中学校に通っていて、一般の人と全く同じような、普通の勉強をしました。

高校のとき、初めて鏡が丘特別支援学校に行って、両方の学校、環境も経験してきたことで、一番感じたのは、普通中学校とか小学校に比べると、差別、偏見というところで、おまえはあれができない、これはできないからだめだっていう人もいて、いじめとか受けるのですが、僕のことを差別、偏見をしていた友達から、本当に悪かったという反省の言葉とかも出てきて、そういう仲間は今でもやりとりして、とってもいい付き合いで、そういう人もいるけど、やさしい人はいるなと感じたのと、たしかに僕は当事者ではあるものの、普通小中学校が長かったので、ほかのいろんな障害を持っている子と、一緒に勉強したり、生活するということは初めてだったので、僕が今までわかっていなかった知識とか、得られるものもたくさんあった。学校行事だったり、いろんな形で幅広く交流も持てるようになってきたし、今現在も自立したいという目標もあって、自立生活センターの皆さんとかかわるようになって、僕に必要なものは何かとか、これからもっと伸ばしていくところを学びながら、いろんな人たちと今後に向けて、意見交換とかできる場がふえてきているのは、とってもいいことなので、これからも差別や偏見とか、みんなと一緒になく

していけるようにどうしていけばいいか考えながら、自分自身も自立できるように頑張っていきたいと思いました。以上です。

司会／ありがとうございます。松田くんとか、カオリさんとかに若いときに普通に友達になっていたら、もっといいなって、話聞きながら思ったんですね。周りに障害がある友達とか、若いときはいなかったし、いろんな人が普通にいたほうが、多分おもしろいんだろうな、楽しいんだろうなというのは、聞きながら思いました。じゃあ、会場のほうからいろいろ、映画見ての感じたこととか、今お話を聞いた意見とかを、お願いしたいのですが。ちなみに、樹木希林さんの言葉に「言わなくていいことはないと思う、やっぱり言ったほうがいいのよ」という言葉がありますので、何か言いたいと思うことがあれば、ぜひ言ってもらえたらと思います。

赤井／赤井トモアキです。

僕のインクルーシブ教育の最終目標は、障害名は特技の欄とか資格欄にかけるくらいになったらいいなと思います。社会は、きちんと障害を認めた上で、やっぱりその障害があるからこそ苦労した面が経験になっていると思うので、それをきちんと理解できる社会をつくっていくのが、ゴールかなと思っています。以上です。

新垣／北部自立生活センター希輝々のアラカキと申します。

人権映画館ということで、教育的な部分で、高校入試を受けていく中で、定員割れしていたら、普通の健常者だったら入れるけど、障害を持っている上で入れないという実情も僕は変えていきたいなって思っているんですね。インクルーシブ教育的な部分で、教育ってどこからかという、幼少時からみんな一緒に育って、高校くらいから、能力みたいな感じではじかれていくという。社会って、ともに学んで、教育的な部分で、受けていかないと、社会的に本当に障害を持っている人が生きていく上で、はじかれていけない社会を、僕はつくってきたいなと思いました。そうじゃないと、このインクルーシブ社会、ともに生きる、ともに生きていくということができないと僕は思っています。

あと、「あん」を見たんですけど、本当にハンセン病の方が本当に社会に出たときに、うわさから偏見、差別、金城さんがいったんですけど、本当にやさしくつくられていると。元ハンセン病の方が、社会に出たときの苦しさは、実際状況、僕はあると思っています。だから、心に傷を受けた人は、立ち直りとか、社会で生きていく上で、傷ついたりしているので、何か人に言えなかったりする場面も多くあると思うので、こういったハンセン病の方が近くにいた場合、ともに生きていこうよという感じの人になってもらえたらいいのかなと思っています。以上です。

司会／そちらの方、トークセッションだけ参加されているということですが、ちょっとお話をお願いします。

参加者／こんばんは。仕事の都合上、トークセッションだけ参加することになってしま

いました。

私と夫は、今、今帰仁村のナカソネというところで、喫茶店をやっています。

なぜハンセン病、語弊があるかもしれないですけど、興味があるかといいますと、この施設が近いので、ここに来ると何だかすごく落ち着くんですね。なので、ぼんやり来ては、金城さんに案内していただいたりとか、絵とか拝見したりしながら、ここで暮らすというのはどうしたことなんだろうなと想像したり、海をみたり、そうやってたまに思い出しては何わせていただいているという、私にとって、大事な場所であります。私の母が聴覚障害を持っていて、母とともに暮らしてきて、楽しそうではあるんですけど、障害を持っていて耳が聞こえなくて、よかったことってあるって、ちょっと残酷な質問ですが、聞いたことがあります。そしたら、ないって言いました。国からお金がもらえることぐらいかなと言ったときに、何かすごく悲しくなってしまうって、何でかなと思ったのですが、やっぱり耳が聞こえないということを実際にひた隠しにして暮らしてきた人生なんですね。なので、やっぱり皆さん、おっしゃっていたように、幼いころからそういう障害があるとか、ないにかかわらず、一緒に交流する場をひとつでも多く、私も立ち会いたいと思いますし、子どもがいるのですが、子どもたちも感じて、言葉じゃないコミュニケーションもあると思うんです。一緒に育みながら、社会っていうか、生きていきたいなと思っています。

司会／今のを聞いて、ある意味、愛楽園という場を地域に開かれた場にしていくという自治会の金城さんの活動が、今の言葉につながっているということを感じて、子どもたちや若い人という、それぞれに届く言葉で丁寧にやっぱりその人権というのを発信するのはとても大事なんだなと思いました。じゃあ、リョウタママ、お願いします。

参加者／こんばんは。私は、2人は孫で、お姉ちゃんは結婚して、孫もいるんです。

子どもいるんですけど、息子、リョウタです。さっきカオリさんとかフブキさんなんか言っていた、彼らがたどってきたというか、その、偏見、近くに自分たちもそうだったのですが、障害持っている方々との、交流は一切なくて、ちょうど自分が小学校のころにその愛楽園、ハンセン病、すごくちょっとむごい言葉しかなかったんですね、その頃。屋我地に行くのはめったになかったんですけど、私も大人になって、リョウタと初めてこの愛楽園という場所に来て、ちょっと心が痛い思いはあったんですけど、今後、希輝々の方とか、イルカさんとか、そういったインクルーシブの方々がやろうとしていることは、今、こっち、小学3年、鏡ヶ丘特別支援学校に行っているんですけど、彼らが大学に行くころには、多分、何の偏見もなく、バリアフリーな学校というか、そういった社会になっていけたらいいなと今私は思いました。

司会／鏡ヶ丘の先輩もいますけど。何か言いたいことありますか、ほかに。先輩から。

大川／こんばんは。お疲れさまです。オオカワハジメです。

一応、知的障害を持っています。自分も、イルカのほうで今、働いていて、自分の活動

として、ピープルファーストの活動というのをやっています。そこでは、差別や偏見、虐待、
というのを訴えながらやっています。先ほど新垣さんがいっていたように、差別はなくな
らないんじゃないかというのは自分も思います。思いを、本人の思いをどう話し合うかな
というだけで、何と云ったらいいかわからなくて、話がまとまりません。すみません。

司会／大川さんの、じっくりした話は個別でまた後で聞いてください。じゃあ、ちょ
と若いほうに戻って、情報保障の部分で、すごい頑張っていたカツレンさん、映画ね、
いろんな工夫をしていたと思うんですけど、やってみて、どんなでしたという話も
踏まえて、お願いします。

カツレン／自立生活センター・イルカのカツレンです。

情報保障の部分で、1回目は字幕があり、2回目が字幕なしという部分を、もし、聴覚
障害者が参加した場合、どんな情報保障が必要なのかなって思ってアイセック・ジャ
パンのほうにいつてきました。アイセックさんは、一緒に考えて、アイデアを出し合っ
ていたんですけど、一番引っかけかかっていたのが、著作権という絡みもあり、それを映画のほ
うで相談できないかって、その許可をいただいた上で、こういった情報保障がついたこ
とは、本当に嬉しかったなって思います。

この映画、「あん」という、それを見て、私、宮古島生まれなのですけれども、宮古島に
もハンセン病療養所があります。そこで、イルカに働くもつと前に、ハンセン病の方と、
出会う機会がありました。

その方とは、女性の方で、初めて会った時は、普通に、コミュニケーションをとって、
何かとても優しい方だなって思いました。なぜここにいるのか、不思議に思って、その
映画館の中に、「陽に当たる社会で生きていきたい」という言葉は、本当に、地域の中で、
限られた地域で過ごしているのだけれども、いろんなところに行きたくても行けない、そ
ういうことがあるんだなっていうのが、この映画をみて感じました。この金城さんが活動
していることは、すごく開かれた地域で生きていくという言葉は、まさにそれだなって思
いました。以上です。

司会／もう、やっぱり映画館、今後も続けていきたいなと私は思うんですけど、皆さん、
どうですか。

今度、那覇でやりたいという声もあったし、あとは、3カ月に1回ぐらい、愛楽園で
映画館開けたらと思っていたりとか、構想もありますので、今回も、ちょっといろいろば
たばたさせてしまって、本当に申し訳なかったのですが、今後また、計画的に取り組んで
いけたらと思っています。じゃあ、リオさん。

高原／希輝々のタカハラリオです。

私は、初めてハンセン病療養所に来たのは、多分、記憶があるうちでは12歳くらい、中学校
1年生だと思えますが、何か病院と施設がくっついたのかなぐらいの、楽観的に考えて

いて、さっき、先週あったシンポジウムの話がちょろちょろ出ていましたが、そこで、光りの扉を開けてという演劇にずっと出ていて、ひよんなことから自立生活センターで働くことになってという、ちょっと不思議な流れで行き着いた先ですが、わからないですけど、別に、何か、そんなあれじゃないですか。

雅春さんとか、普通に生きていて、ツンデレのおじいちゃんみたいな感じで、別に、ハンセン病だったからどうのこうって、関係ないんじゃないかと思うんですよ。でも最近、8、9年くらいのつき合いなのに、おうちに呼んでももらえないのが寂しいなって思っていて、ちょっと雅春さんにご招待してもらえるのを期待しているんですけど。でも、それくらい普通っていいじゃないですか。別に、普通じゃないですか。

だって、私、愛楽園、祖父母の家より頻繁に来るおばあちゃんちみたいな感じだし、そういうのが普通だったり当たり前の社会、ハンセン病だったからどうか、障害だからどうか、そういう社会が普通になればいいんじゃないか、超すごい大型的(?)発想なんですけど、別にみんなが普通に楽しく笑いながら、ここではインクルーシブが実現している。

身体、精神、知的、発達、ハンセンもいて、健常者という人もいて、変わった人もいて、普通の人も、子どもも大人もいて、おもしろいじゃないですか。そういうコミュニティを大切にできる社会ならいいなと思いました。以上です。

司会/いいな。キーワード出たね。やっぱね、日常、当たり前、これが運動の原点ですよ。本当に。すばらしいですよ。最後に何もわからない若者代表、わからなかったところだと思っんで、今回の経験を通しての、ピフォアアンドアフターを語ってもらえますか。

黒島/何もわからない学生ではありますね。レイコさんと知り合うまでは、本当に障害者とはかかわったことなく、車椅子見てもちょっと目をそらしちゃう感じだったんですけど。ハンセン病について、今知れてよかったなというのが一番大きいです。高校生とか中学生のときに知っていてもよかったのかなと思うんですけど、そのときに知っていても、授業だから感想文書いて提出して忘れるとかだったと思うので、大学生になって、3年前よりかは脳が発達していると思うので、ちょっとは考えられるようになって、すばらしいですよ。人権映画館というのをまだ第1回目なので、これから何回かやって、どんどん若い人たちを呼んでいけるようにしたいですね。若い人たちに伝えていきたいというものの、この場に若い人が少ないという現状もあり。若者代表として、イルカで頑張っています。終わりです。



トークセッションの様子ようす



6. ConstantGrowth (コンスタントグロウ) について



ConstantGrowth コンスタントグロウ

2013年3月結成のバンド。

メンバーは Va. 勇武(イサム)、AGLSUKE(スケ)、Ba. 春菜(ハルナ)、
Dr. 利奈(リナ)、Key. 華子(ハナコ)、EGL 茂徳(シゲノリ) の計6名。

ボーカルの勇武は生まれながら筋肉が徐々に衰えて息をする筋肉さえ奪われると言われる
進行性の難病「脊髄性筋萎縮症」を抱え歩かず。

2016年に開催された「第13回ゴールドコンサート」にて初出場でグランプリを獲得！
現在は無料CDを配布しながら、県内外で精力的にライブを行う。

ConstantGrowth はすべての枠を越え、音と想いを伝えていきます

ConstantGrowth は現在 CD を無料配布中！
100万枚の CD を無料で配布するプロジェクトを行っている。
ミリオンセラーではなく、ミリオン配布で
ConstantGrowth の歌がたくさんの方に届きますように

<http://www.constantgrowth.com> **コンスタントグロウ**

7. アンケート

回収できたアンケート数が少なかったため、集計はせずに、アンケートに記入していただいた意見等について紹介していきたいとおもいます。

「第3回インクルーシブ教育フォーラム in おきなわ愛楽園 HUMAN RIGHTS THEATRE
～人権映画館～」についての意見や要望

・当事者の方々の意見を聞くことは、このようなイベントの他にあまりないとおもいます。なので、映画についてインクルーシブについてのトークセッションに参加できたことが印象的でした。ありがとうございました。(20代・女性)

・小学生低学年には長すぎて集中して観るのは難しいので、子供たち用に短編のアニメとかもあると嬉しいと思いました。ママ友たちを誘いやすい。(30代・女性)

・エクスクルーシブ(排他的)な雰囲気はただよう社会(ヘイトスピーチや沖縄バッシング等)の中で、今後もこのような取り組みを続けられてください。できれば、北部地区でも開催いただけると幸いです。(40代・男性)

・ここで見る事にとっても意味深いものがありました。(50代・女性)

・フォーラムというより、映画「あん」に感動した。本当生きる意味があるって言葉ステキです。(50代・女性)

・こういう企画には参加したい。差別の問題といえば、ヤマトからのウチナー差別、ヤマト内の部落差別など今後とりあげてほしい。(60代・女性)

・一般の方々や若い世代、特に学校の先生に広くお知らせし、その輪を広げていくことで社会に浸透していくことかとおもいます。(60代・男性)

・なかなかテレビ以外で見たり聞いたりする機会がないので、チャンスがあれば参加したいです。(70代・女性)

8. 新聞記事

21 地 域 2019年(平成31)年 1月13日 日曜日

沖縄タイムス

ハンセン病差別なくそう

名護・愛楽園 映画「あん」上映会

元患者ら意見交わす

【名護】元ハンセン病患者に対する差別を無くすための映画「あん」の上映会が、名護市愛楽園のホールで開かれた。元ハンセン病患者らと一般市民ら約30人が参加し、上映後には意見交換会が開かれた。元ハンセン病患者らからは、差別を無くすための取り組みについて話された。

主役はNPO法人愛楽園が中心で、映画「あん」は、元ハンセン病患者らが主人公の物語。元ハンセン病患者らからは、差別を無くすための取り組みについて話された。

元ハンセン病患者や関係者が集まり、意見交換会が開かれた。人権と差別について考えを深めたトークセッションも開かれた。名護市愛楽園・国立療養所沖縄愛楽園

元ハンセン病患者らと一般市民ら約30人が参加し、上映後には意見交換会が開かれた。元ハンセン病患者らからは、差別を無くすための取り組みについて話された。

主役はNPO法人愛楽園が中心で、映画「あん」は、元ハンセン病患者らが主人公の物語。元ハンセン病患者らからは、差別を無くすための取り組みについて話された。

元ハンセン病患者や関係者が集まり、意見交換会が開かれた。人権と差別について考えを深めたトークセッションも開かれた。名護市愛楽園・国立療養所沖縄愛楽園

2019年1月13日、^{ねん} ^が ^つ ^に ^ち ^お ^{きな} ^わ ^と ^あ 沖縄タイムスさんに取り上げてもらいました。

9. 総括

私たちが沖縄県自立生活センター・イルカには、障害のある人もない人も共に暮らせるような社会にしたいという大きな目標があります。その目標を達成するためには、社会全体に「人権」について考えてもらう必要があるという考えから、映画上映を通して参加者の方々に「人権」について考えてもらうキッカケになればと思い、このようなイベントを開催することになりました。

2018年10月8日(月)から実行委員の集まりを設け、第3回インクルーシブ教育フォーラムをどのような形でイベントをするかという議題から始まり、何度も話し合ってきました。ポスターやチケットの準備、出店ブースの協力依頼、映画上映の依頼など様々な作業を、本番ギリギリまで準備していました。

今回のイベントでは、色々な方面から多くの方々に参加していただき、全体で113名という参加者になりました。会場が北部にある愛楽園ということで、集客に不安がありましたが、参加者が100名を超え、実行委員としてもとても嬉しい結果になりました。また、最近のイベントでは内部のメンバーが参加者となるが多かったのですが、今回のイベントでは外部の方々にも参加していただきました。ありがとうございます。

反省点としては、準備期間が短かったことや役割分担などが上手くいかなかったこと、映画「あん」を人権に結び付けるプロセスが上手くいかなかったことが挙げられました。たくさんの反省点を、次の人権映画館に生かせるようにしていきたいと思えます。

そして、助成金面で多大なる支援をしていただいたJT様や共催していただいた愛楽園自治会様をはじめとする多くの団体・企業様、後援していただいた沖縄県知事様をはじめとする多くの団体・企業様に心より厚く御礼申し上げます。また、映画「あん」の上映で協力していただいたシアタードーナツ様・新日本映画社様、出店や要約筆記、手話通訳、託児所ボランティアで協力いただいた団体・個人様、素敵な歌声を披露してくださいました謝花勇武様、多くの方々に心より感謝申し上げます。

最後に、「第3回インクルーシブ教育フォーラム in おきなわ愛楽園 HUMAN RIGHTS THEATRE～人権映画館～」に参加して下さった皆様、拙いイベント運営で至らない部分もあったと思いますが、参加して下さり深く御礼申し上げます。